

# 「柏崎の水」

## 広田鉱泉

広田鉱泉の発祥は天保末期（1840～1844頃？）にさかのぼる。大広田の村山家が隠居所に源泉を引いて利用したのが始まりとされ、幕末には湯治場として近郷に知られるようになった。旅館営業が開始されたのは明治のはじめ頃であり、「年表でつづるふるさとの足跡」（北条公民館発行）では、明治13年（1880）広田奥の湯開業、と書かれている。

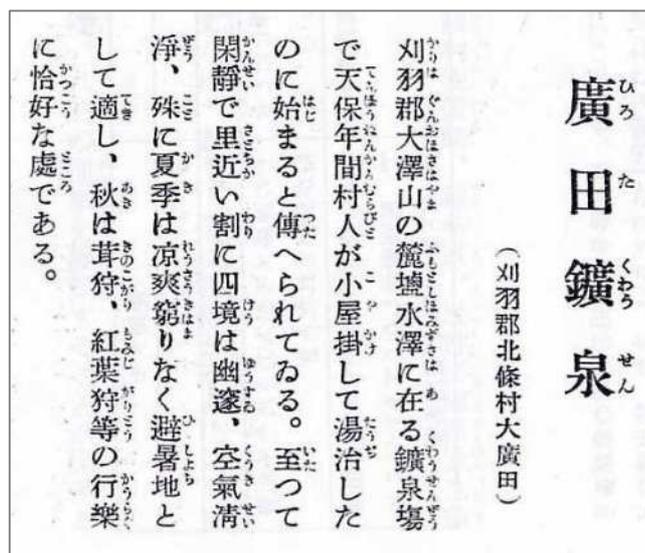
広田鉱泉は昔から雪をとかず湧き水として知られていた。源泉はおよそ20であるが、これを天然ガスで温めて浴用としている。このガスは広田油田を採掘した際に噴出したものである。手掘り時代からの古い歴史を持つ広田油田は、明治から昭和初期にかけて盛んに採掘が行われたとされ、採掘作業員の増加にあわせるかのように、次々この地に鉱泉旅館が建てられたという。



明治～大正期の広田鉱泉全景  
小竹コレクション絵葉書より

### 参考にした本

- 「北条町史」北条町史編纂委員会 編（224 キタ）
- 「越後の湯」朝日新聞社新潟支局 編（290 アサ）
- 「ふるさと北条ものがたり」北条南小学校 編（224 Kキタ）
- 「刈羽郡社会科資料集」刈羽郡社会科研究グループ 編（375 カリ）
- 「石仏のまち」を歩く」阿部茂雄 著（387 アヘ）
- 「角川日本地名大辞典」（290 カト）



「新潟県温泉誌」（昭和8年発行）  
広田鉱泉の紹介頁の冒頭部分

広田鉱泉の最寄駅は、大正10年12月開業の越後広田駅である。駅から旅館は広田川に沿って東方へ約2km。徒歩のほか人力車に乗ることができた。また、自動車が登場した昭和前半には汽車の発着ごとに、鉱泉組合が運営する小型乗合自動車が往復した。広田鉱泉の湯は、神経痛・胃腸病・婦人病などによく効き、肌にもやさしいといわれる。その効用からか湯治客のほか農家の人々もよく湯に浸かりに来ており、利用客が多い時期は農閑期の夏・冬であったとの記録もみえる。ちなみに昭和8年頃の宿泊料金は「1等2円、2等1円50銭、3等80銭または1円」、日帰りの入浴料金は「1回5銭、1日15銭」とある（当時の帝国ホテルの料金は1人1泊10円、東京の銭湯料金は7銭、豆腐1丁5銭）。

旅館を通り過ぎて奥まで行くと、湯治客が病氣平癒を祈願したであろう、薬師如来や石仏が祀られている。100年以上の歴史を持つ広田鉱泉は、昔も今も人々に静寂と癒しを提供している。